
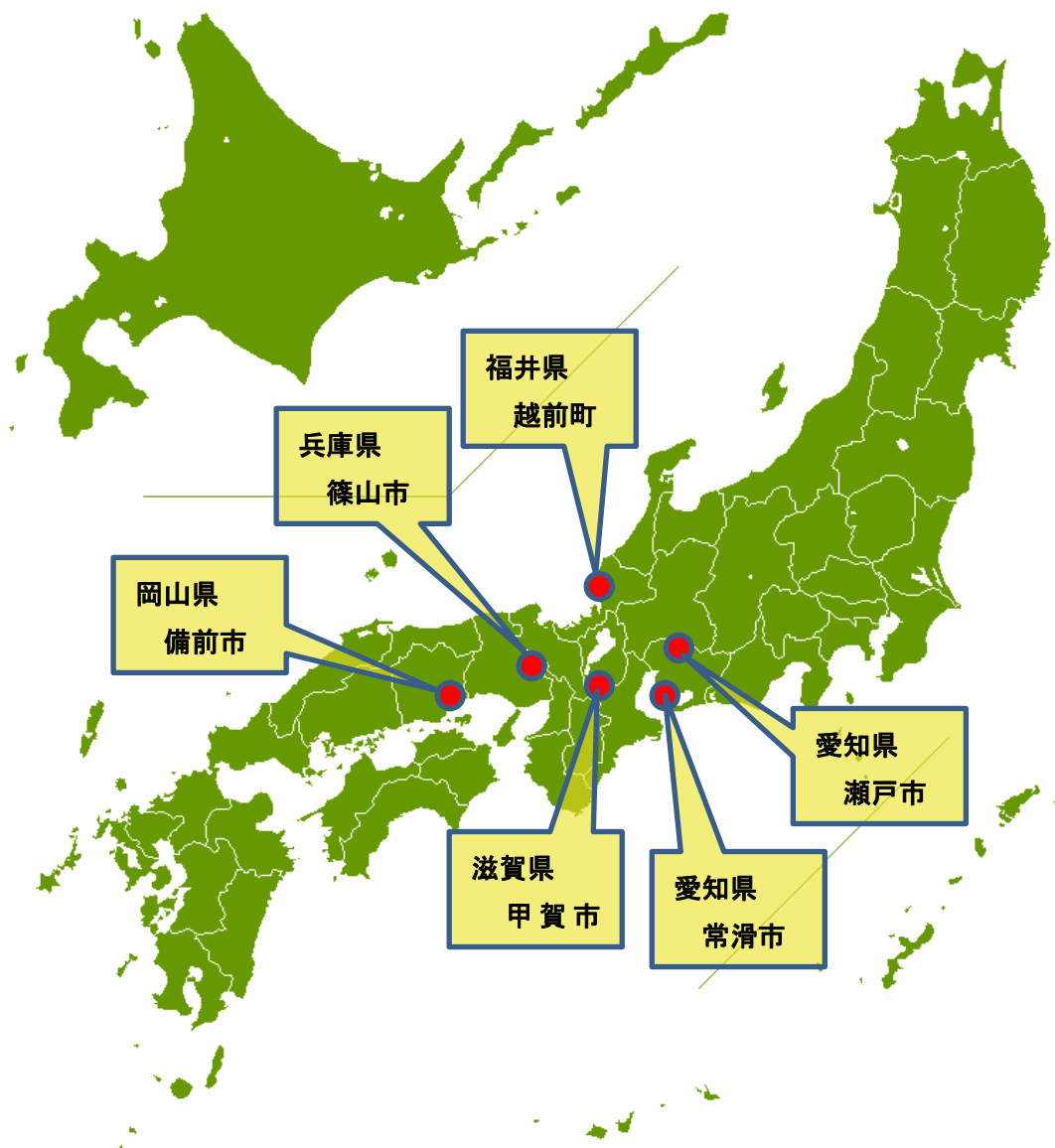


① 申請者	越前町、瀬戸市、常滑市、 甲賀市、篠山市、◎備前市	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
きっと恋する六古窯 ー日本生まれ日本育ちのやきもの産地ー			
④ ストーリーの概要（200字程度）			
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-start;"> <div style="text-align: center;">  <p>土管坂（常滑市）</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>煉瓦煙突の景観（備前市）</p> </div> </div> <p>瀬戸、越前、常滑、信楽、丹波、備前のやきものは「日本六古窯」と呼ばれ、縄文から続いた世界に誇る日本古来の技術を継承している、日本生まれ日本育ちの、生粋のやきもの産地である。</p> <p>中世から今も連綿とやきものづくりが続くまちは、丘陵地に残る大小様々の窯跡や工房へ続く細い坂道が迷路のように入り組んでいる。恋しい人を探すように煙突の煙を目印に陶片や窯道具を利用した堀沿いに進めば、「わび・さび」の世界へと自然と誘い込まれ、時空を超えてセピア調の日本の原風景に出会うことができる。</p>			
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	備前市市長室秘書広報課世界・日本遺産推進係 係長 横山裕昭		
電 話	(0869) 64-1800	FAX	(0869) 64-3845
E-mail	【代表】 bzhisho@city.bizen.lg.jp 【個人】 h.yokoyama@city.bizen.lg.jp		
住 所	〒705-8602 岡山県備前市東片上126		

市町村の位置図（全国地図）

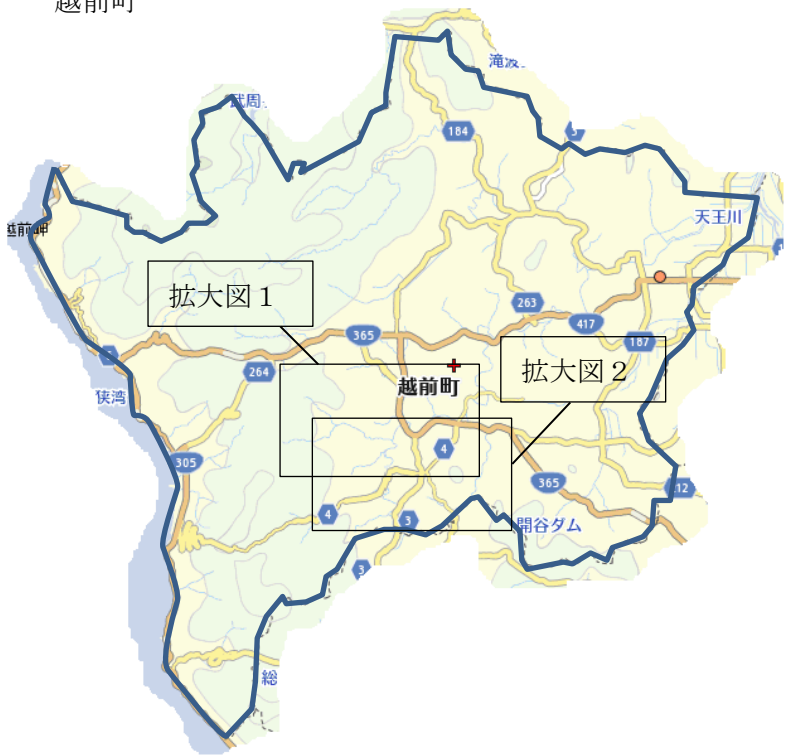


市町村の位置図（越前町）

福井県



越前町



「1-7 越前窯跡群」は拡大図 1・2 の地域内に点在。

構成文化財の位置図（越前町）

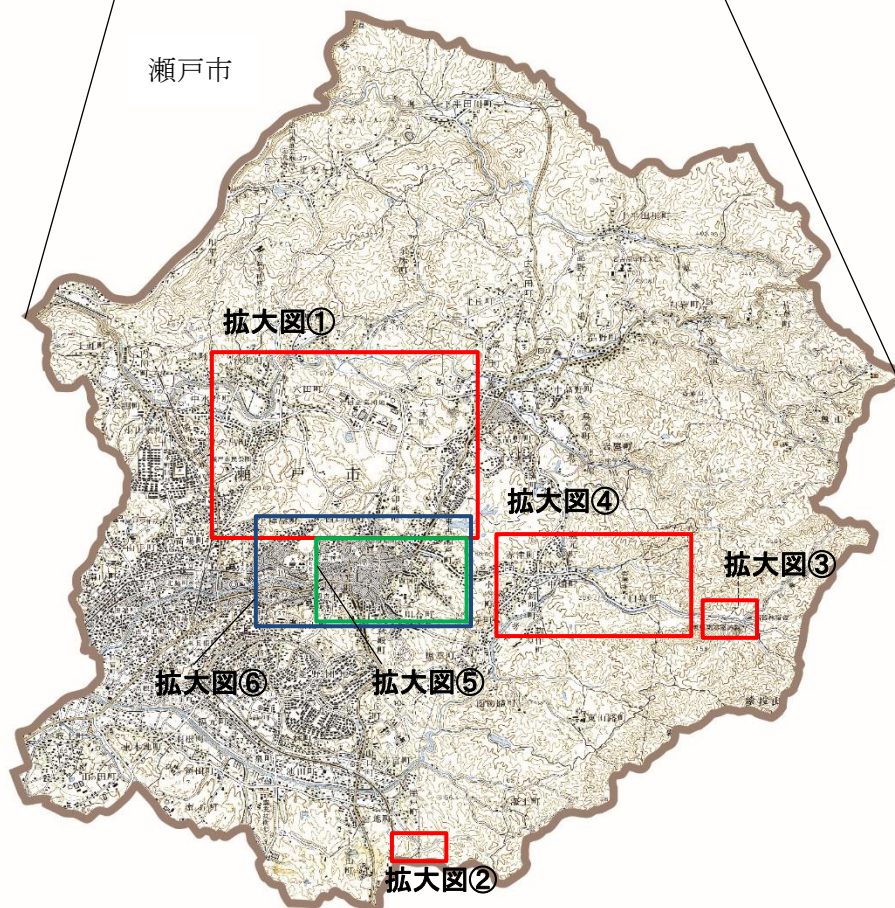
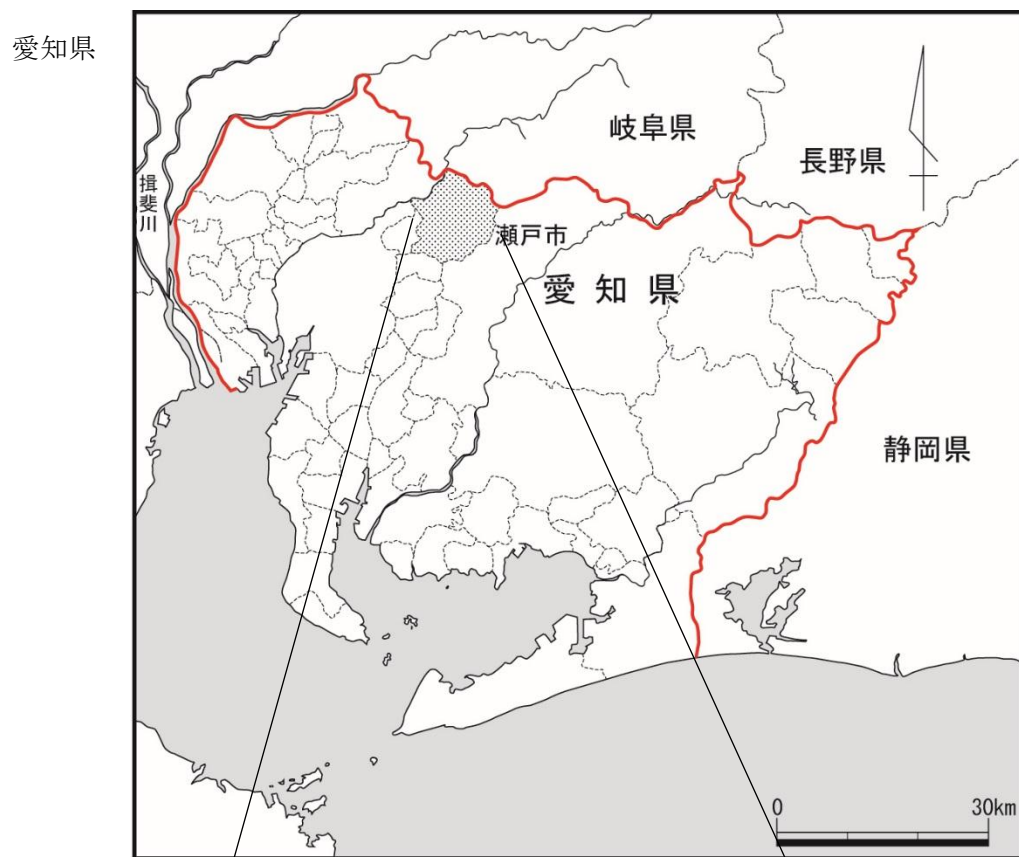
拡大図 1



拡大図 2



市町村の位置図（瀬戸市）



構成文化財の位置図（瀬戸市）

※2-6 は個人蔵のため未記載

拡大図①

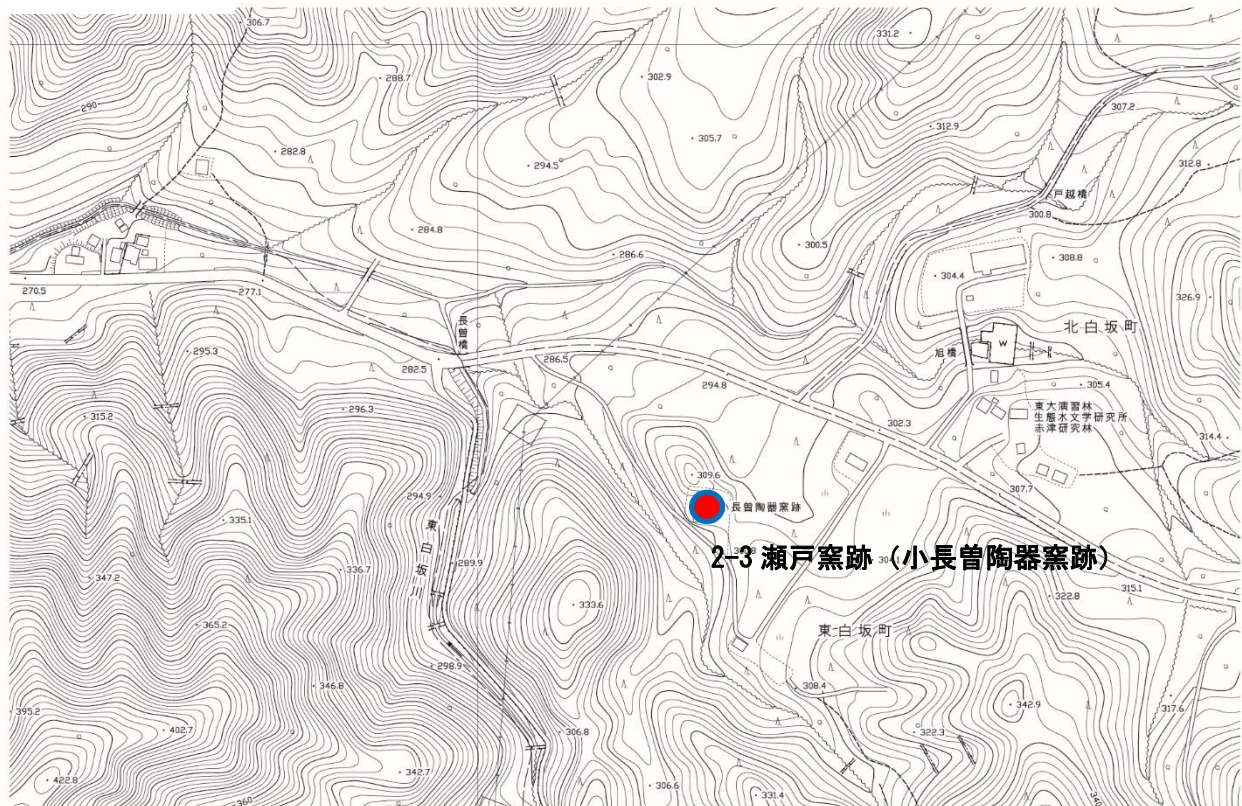


拡大図②



構成文化財の位置図 (瀬戸市)

拡大図③

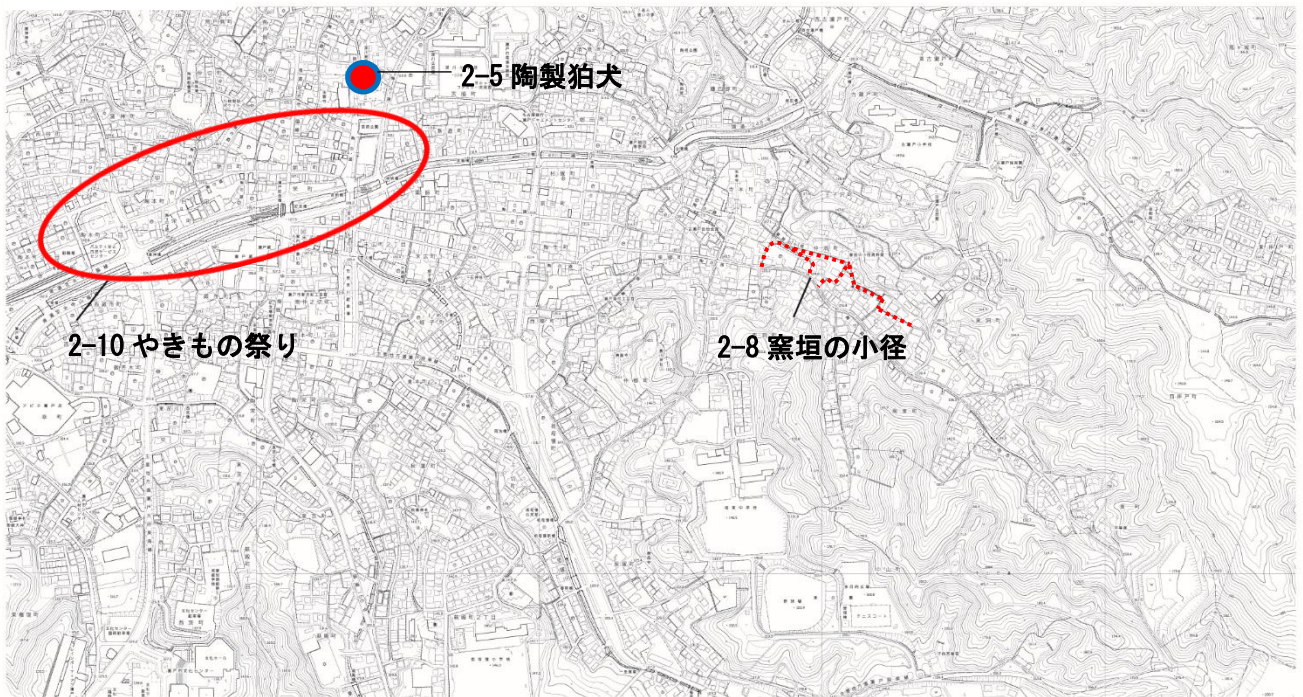


拡大図④



構成文化財の位置図（瀬戸市）

拡大図⑤



拡大図⑥



市町村の位置図（常滑市）



拡大図 1

拡大図 2

構成文化財の位置図（常滑市）

拡大図 1



拡大図 2

常滑市陶磁器会館

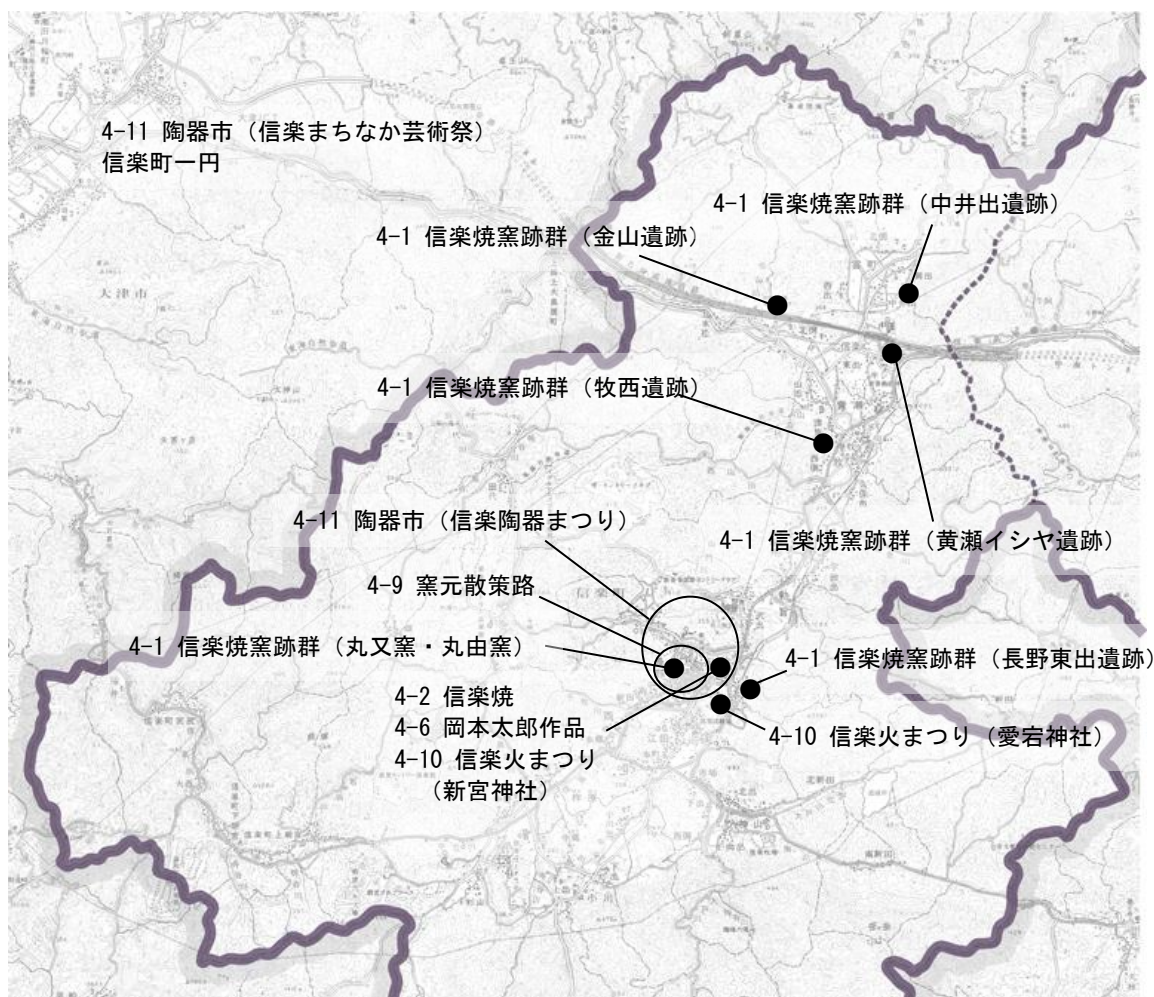
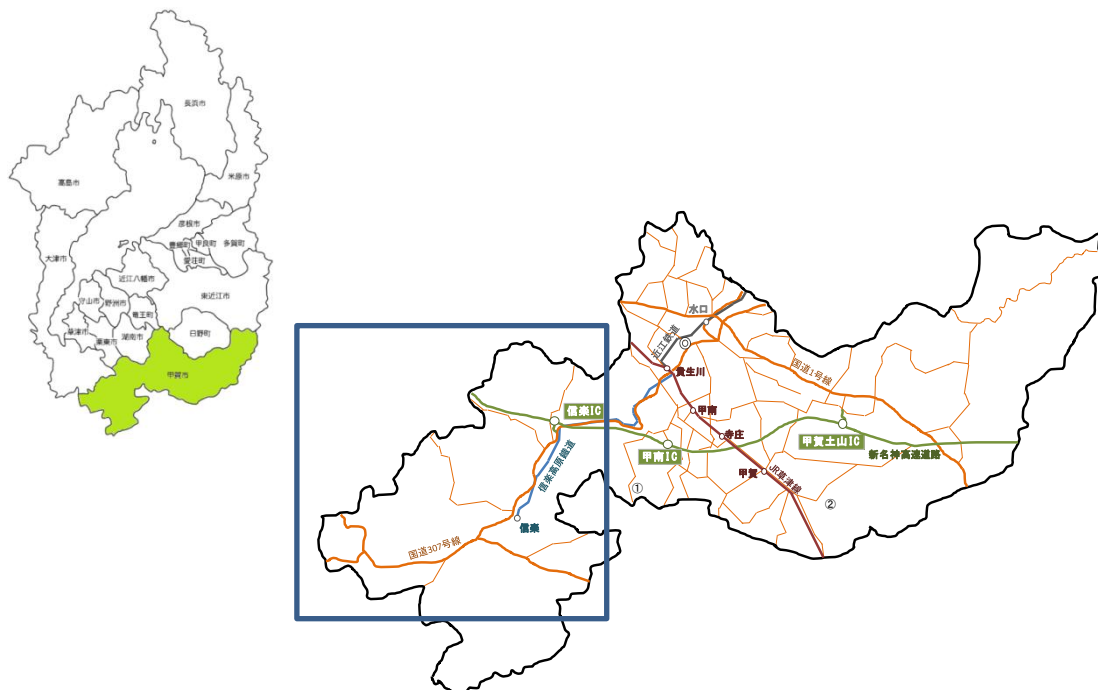
3-1 やきものの散歩道の文化的景観



3-8 窯のある広場・資料館

構成文化財の位置図（甲賀市）

※4-7 古琵琶湖層は市内全域

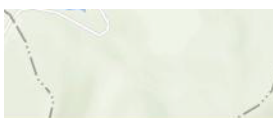
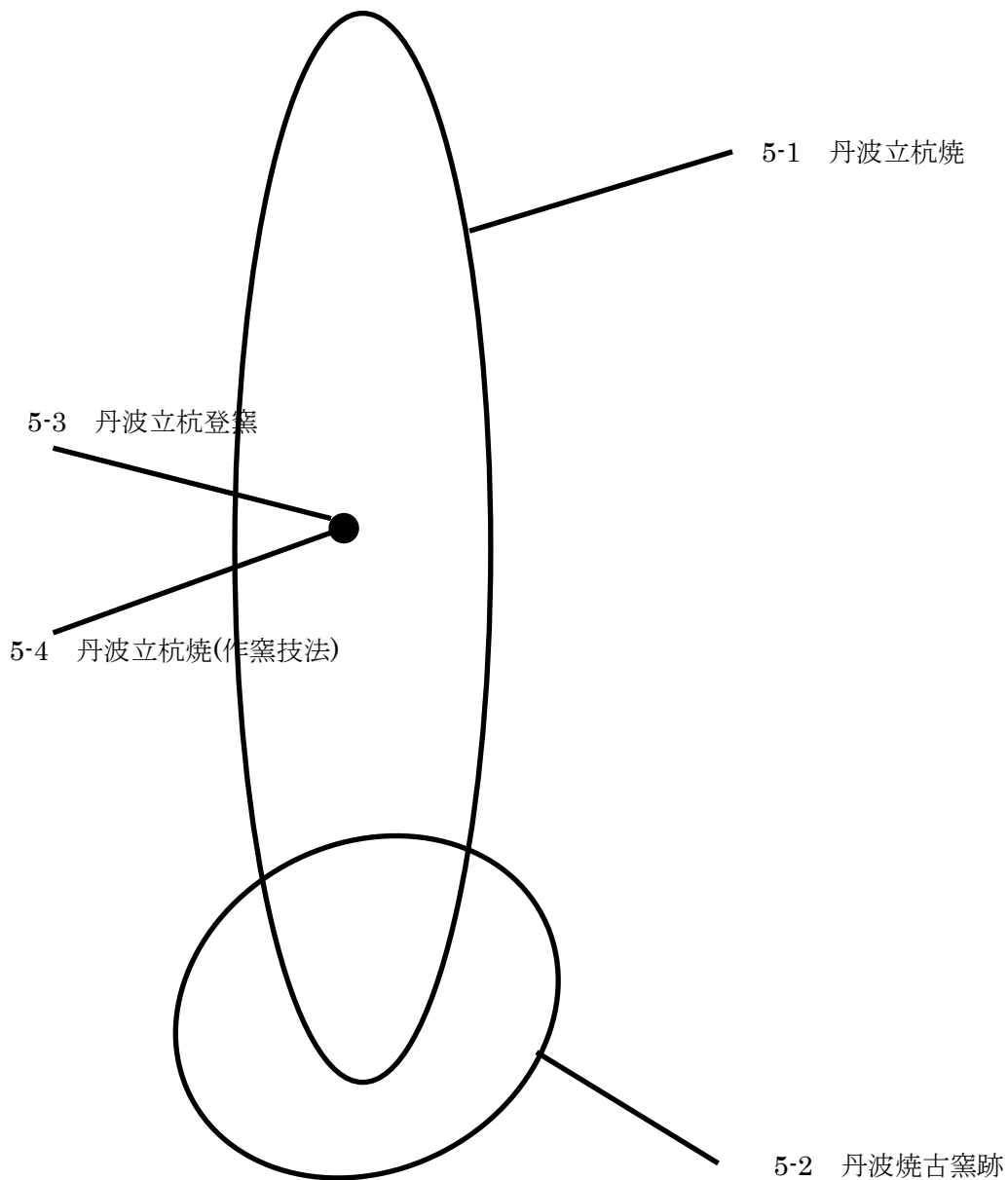


市町村の位置図（篠山市）



構成文化財の位置図（篠山市）

ア 今田地区

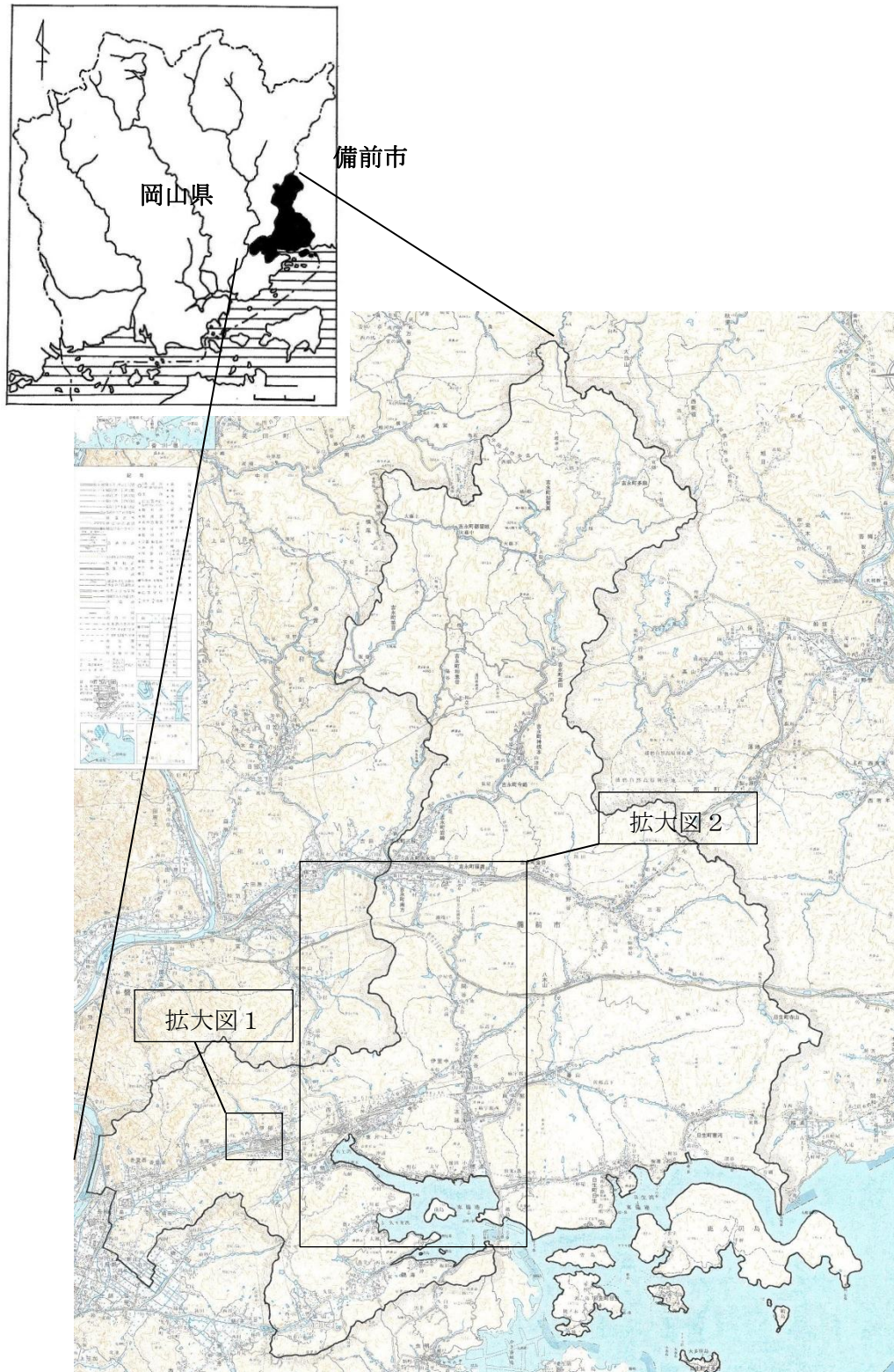


イ 城下町地区



5-5 古丹波コレクション

市町村の位置図（備前市）



構成文化財の位置図

(拡大図 1)



(拡大図 2)



ストーリー

◆六古窯と日本人の心

数百年から千年を超える六古窯。すなわち、施釉陶器の瀬戸^{せと}と焼締陶器の越前^{えちぜん}・常滑^{とこなめ}・信楽^{しがらき}・丹波^{たんば}・備前^{びぜん}である。

中世は平安時代の公家政権から武家政治へと段階的に移行したことに加え、民衆の力が台頭した時代である。そのため、東は静岡県から南は三重県、北は岐阜県高山市近くまで山茶碗窯ができていく。その一大勢力が常滑焼である。常滑の影響を大きく受けて越前焼は平安時代末期の12世紀後半に、丹波焼は鎌倉時代の13世紀に、信楽焼は鎌倉時代後半に開かれた。一方、備前焼は5世紀から続く^{おくすえき}邑久の須恵器の系譜を引き、平安時代末期から鎌倉時代初頭に備前市およびその周辺に移動したのである。また、瀬戸焼では猿投窯の伝統を受け継ぎ、10世紀後半には瀬戸市南部において施釉陶器を生産したのである。

茶陶の一大ブランドであり後にやきものの代名詞「せともの」となった瀬戸の窯垣の小径、近代主力生産品の土管や焼酎瓶が再利用された土管坂がある常滑のやきもの散歩道、おどけた表情のためきたちが出迎える信楽、日本海側に広く流通し福井城にも供給された日本三大瓦のひとつ越前の赤瓦、堅牢な焼き締めを生かし、未来永劫に教育を続けられるようにと瓦に利用した旧閑谷学校がある備前、現存最古の登窯である「丹波立杭登窯」は地域が一体となり大修復と窯焚きが復活するなど六古窯には窯の火を絶やすことなく続く伝統を、世紀を超えて支え続ける情熱を感じられる。

◆自然を生かす窯業のふるさと

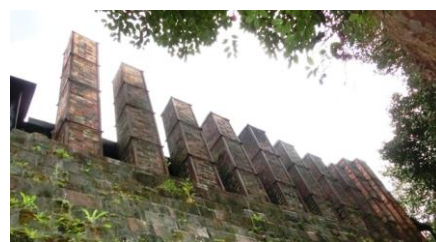
六古窯の産地は良質の「土」に始まる。山中で採れる陶土や古琵琶湖層・瀬戸陶土層の蛙目粘土、木節粘土、そして田土（ヒヨセ粘土）などで、これらをブレンドして使用している。陶工たちは大地がはぐくんできた「土」を数年かけて子どものように育てるのだ。

往時をしのばせる山々や丘陵の自然な傾斜を利用した数々の窯跡。50mを超える窯跡を有する国指定史跡「備前陶器窯跡」等がまちを取り囲むようにある。今も窯のふもとには工房があり、赤煉瓦や土管を積み上げた煙突が次々と現れる。それらに続くように住居を兼ねたギャラリーが軒を連ねているが、細く緩やかな坂道を上り下りしながら迷い込むような路地に入ると古い土塀に焼き物の破片や窯道具やごつごつとした古い窯の破片が埋められていたり、窯焚きに使う大量の薪が積み上げられていたりする。薪は轟々と炎となり陶工の顔を火照らすのであろうと思いをはせる。

また、神社の入り口でそぞろ歩く人々を見守っている陶製の狛犬や陶器で装飾された橋など、いかにも窯業のまちならではの風情を醸し出し、ロマンを感じる。六古窯の営みは、やきものの色合いがそのままセピア調の街並みの趣となっている。



びぜんとうきかまあと いんべみなみおおがまあと
備前陶器窯跡（伊部 南 大窯跡）



立ち並ぶ煉瓦の煙突



こまいぬ
まちを見守る陶製狛犬

◆やきものに恋してしまうまち

高温で長時間焼き上げる器たちは堅牢で割れにくく、使用される土や製作、焼成技法などさまざまな条件により、作品の質感や色、窯変などは異なり一つとして同じものはできないといわれる。こうした微妙な違いを生み出すやきものではあるが、それを景色として楽しむ大らかさが日本人の文化であろう。景色に溶け込むように並べられたやきものは千差万別。人の心と同じである。豪快で無骨な常滑焼や越前焼、明るく健康的な信楽焼に質朴で釉流れの美しい丹波焼、堅牢で堂々とした備前焼、そして唯一釉が掛けられた優雅さと逞しさを兼ね備える瀬戸焼と、六古窯の名で親しまれたやきものは、最も日本らしいやきものとして多くの人々の心を取りこにってしまう。

室町時代後期、わび茶の祖とされる村田珠光が、茶人としての心のあり方や美意識を説いた。15世紀前半には唐物茶壺の価値が高まり、その影響をうけて和物茶壺の生産が始まる。この頃から『わび・さび』の理念の基に、茶の湯は作法とともに道具使いなどにおいて大きな変革が行われた。それに伴い茶の湯の道具、茶陶の生産が活発化した。茶の湯により連綿と受け継がれてきた美意識は、日本人の自然なものへの愛着の現れであり、素朴で素材を生かそうとする控えめな風合いの茶器や食器は名将や茶人、食通に愛されてきた。

土と炎によって生み出され、人々の生活をささえ続けた「うつわ」には、それを享受した人々の、豊かで生き生きとした生命力が宿り、躍動感にあふれている。これらの地域では土肌の味わいと流れる施釉・自然釉の美しさをもつ陶器の存在を通して、時代をたくましく生き抜いてきた人々と大地のエネルギーを五感で感じ取ることができる。

◆伝統が息づくやきもののまちは心の原点 —そうだ 陶郷、行こう。—

六古窯の各地域では自然と人間とを大きな視野で捉えている。窯業は地域の伝統産業として精神的支柱となり、各地の陶芸村や陶芸の里、陶芸センターなどでは、独特の景観のなかで技術と伝統の継承が行われている。それぞれの特色を活かして原点回帰するとともに新しい試みを続けている。古陶ブームと共に伝統技術を復興したつくり手たちが活躍するようになる。信楽ではその技術に注目した岡本太郎氏の太陽の塔の裏の顔の制作をはじめとし、各地にも芸術家が頻繁に出入りし、作品制作を行うようになっており現代美術に昇華している。

また、第85回を数えた瀬戸市の「せともの祭」をはじめ、各産地で行われる陶器市は、海外からも多くの人が訪れる有数のイベントとなっている。店頭に並べられた陶器はさながらまちなかのミュージアムとなり、来訪者は焼き物の肌触りを味わい、使い込むほど味が出る六古窯の陶器を求め、旅情を楽しめる。

六古窯は、各々で育まれた伝統や製作技術とともに、さりげなくそしてほのぼのと来訪者を出迎える街並みとやきものが日本人のおもてなしの心を表している。



越前焼

瀬戸焼
古瀬戸瓶子

常滑焼



信楽焼



丹波立杭焼



備前焼

海揚り緋襷鶴首徳利

ストーリーの構成文化財一覧表（越前町）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
1-1	えちぜんやき 越前焼	未指定	越前焼の発祥は今から約850年前の平安代末期と言われる。上薬を使わなくても水を通さない丈夫な焼き物と言う特長から、主に水がめ(水や穀物用)や、すり鉢などの日用雑器を中心に生産された。室町時代後期には北前船によって北は北海道、南は鳥取県まで運ばれ、北陸最大の窯業産地として発展した。現在では伝統を生かした新しい作陶も試みられるとともに、越前独特のねじたて成形も継承されている。	福井県 越前町
1-2	つるぎじんじやほんでん 劔神社本殿	県有形 (建造物)	越前町織田に鎮座する劔神社は、越前焼生産を主導し、平等村の工人たちも氏子であった。 当地域でしか見られない織田造の象徴的な神社建築。	福井県 越前町
1-3	とうげいえちぜんおお 陶芸越前大がめ ねじたてせいけいぎほう 捻じたて成形技法	県無形	平安時代より現代に伝わる、越前焼大甕の成形技法。	福井県 越前町
1-4	しんめいがたに す え き がまあと 神明ヶ谷須恵器窯跡	県史跡	越前焼以前の須恵器生産の実態を示す遺跡。窯体が覆い屋で保存されている。	福井県 越前町
1-5	えつなんがま 越南窯	未指定	燃料(薪)不足に悩んだ瀬戸の本業窯の窯元が苦心して完成させたという幻の登り窯。日本を代表する陶芸家である、瀬戸の加藤唐九郎氏の指導により再現したもの。	福井県 越前町
1-6	つるぎじんじやもんじよ 劔神社文書	県有形 (古文書)	戦国時代、平等村の上層農民が越前焼を生産していたことを物語る資料。	福井県 越前町
1-7	えちぜんかまあとぐん 越前窯跡群	町史跡	中世・近世の越前焼生産の実態を示す遺跡。町内に 200 基を越える窯跡が存在する。	福井県 越前町

1-8	きたかまやかめばか 北釜屋甕墓	町史跡	越前焼生産に従事していた職人の墳墓。甕を墓標とするなど、全国でも希有な事例。	福井県 越前町
1-9	さんきん こ 三筋壺	町有形 (考古資料)	平安時代後期の蔵骨器。越前窯のルーツが常滑窯に求められることを明らかにした資料。	福井県 越前町
1-10	えちぜんあかがわら 越前赤瓦	未指定	日本三大瓦のひとつ。越前町平等区を中心に生産され、越前焼と同じ窯で焼かれた。江戸時代以来、日本海側に広く流通。福井城・金沢城などにも供給された。	福井県 越前町
1-11	えちぜんがわら 越前瓦	未指定	明治時代以降、赤瓦に代わって普及した銀鼠色の瓦。耐寒・耐久性に優れている。現在の越前の伝統建築はほぼ銀鼠色の越前瓦で統一され、特色ある景観をつくりだしている。	福井県 越前町

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

ストーリーの構成文化財一覧表（瀬戸市）

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
2-1	とうど けいしゃ 陶土・珪砂採掘場	未指定	主に木節粘土や蛙目粘土が産出される鉱山で、その風景は見る人を魅了する圧巻の風景である。	愛知県 瀬戸市
2-2	ひろく て ごうかまあと 広久手第 30号窯跡	市指定史跡	瀬戸市域ではじめて灰釉陶器生産が行われた平安時代の窯跡。瀬戸窯最古段階の窯跡。	愛知県 瀬戸市
2-3	せ と かまあと 瀬戸窯跡 こな が そ とう き かまあと 小長曾陶器窯跡	国史跡	室町時代の古瀬戸を生産した赤津の窯跡で、その 300 年後に、尾張藩主の命により窯炉が再利用され、茶陶生産が行われた。	愛知県 瀬戸市
2-4	せ と かまあと 瀬戸窯跡 へいじ とう き かまあと 瓶子陶器窯跡	国史跡	近世赤津村の窯跡。尾張藩士の名が書かれた陶札が出土しており、茶陶の注文生産が行われたことで知られる。	愛知県 瀬戸市
2-5	とうせいこまいぬ 陶製狛犬	国重文 (工芸品)	創建 771 年、式内社である深川神社に伝わる陶製の狛犬。古瀬戸生産の創始者といわれる加藤四郎左衛門景正作と伝えられる。	愛知県 瀬戸市
2-6	こ せ と へいし 古瀬戸瓶子	市指定 (工芸品)	鎌倉時代中期、古瀬戸生産の前期に生産されたもので、武家の都である鎌倉に集中して運ばれた製品のうちの代表的な器種。	愛知県 瀬戸市
2-7	かまがき 窯垣	未指定	瀬戸市の中心市街地周辺、近世瀬戸村域の随所でみられる。窯道具であるエンゴロ・棚板などを組み合わせて構築した擁壁や塀で、瀬戸特有の雰囲気醸し出している。	愛知県 瀬戸市
2-8	窯垣のこみち 小径	未指定	洞の生活道路として、また、窯の燃料や製品を運ぶ産業道路として活用された道。窯垣が随所にみられる。	愛知県 瀬戸市

2-9	あかつ 赤津瓦	未指定	赤茶色が特徴的で、近代以降、特に赤津地区の窯屋のモロ（工場）などで使われた。発色の変化により、美しい様々な模様がみられる。	愛知県 瀬戸市
2-10	やきもの祭り	未指定	瀬戸を代表する祭りとして、陶祖藤四郎の遺徳を偲ぶ「せと陶祖まつり」（4 月）、磁祖加藤民吉の偉業を称える「せともの祭」（9 月）がある。	愛知県 瀬戸市

（※ 1）文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

（※ 2）指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

（※ 3）各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

（※ 4）ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

ストーリーの構成文化財一覧表（常滑市）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
3-1	やきもの ^{さんぽみち} の散歩道の文化的 景観	未指定	<p>とこなめ市^{とうどきかいかん}陶磁器会館を起点にして散策することができ、他の地域には見られない陶^{とう}の風景を感じることができる。</p> <p>【土管坂を始めとした焼物で作られた土留壁】</p> <p>土留壁^{どりゅうへき}は散策地内のいたるところで見られ、常滑独自の景観を成している。これらは作爲的なものではなく、古くから焼物とともに生活してきた当時の住人たちが主要生産品である甕^{かめ}や土管等の一部を坂道や崖などの土留めに再利用してできたものである。その中でも土管坂と呼ばれる場所は、元々はただの生活路地^{せいかつろじ}にすぎなかったが、土管と焼酎瓶が積み上げられた特徴的な風景が多く^{どかんざか}の来訪者に注目され、やきもの散歩道の代表的なスポットとなった。</p> <p>【れんが煙突】</p> <p>現在、残存する数は少なくなったが、戦後の最盛期にはおよそ400本が林立し、そこから絶え間なく吐き出される煙^{けむり}は当時の「焼物の町常滑」の象徴となっていた。</p>	愛知県 常滑市
3-2	とこなめ ^{と う き} 常滑の陶器の生産用具・製品	国重要有形民俗	<p>常滑焼の始まりといわれる平安時代末期からのもので、現在はとこなめ陶^{とう}の森資料館^{もり しりょうかん}で 1,655 点（生産用具 1,131 点、製品 524 点）が貴重な資料として保管されている。当時は甕^{かめ}や壺^{つぼ}などの大型の製品が大半で、その他では皿・茶碗・鉢などの日常雑器^{にちじょうざつぎ}も作られていた。</p>	愛知県 常滑市

3-3	のぼりがま 登 窯	国重要有形民 俗	名称は陶栄窯。明治 20 年に建設され た連房式登窯で、約20度の傾斜地に 8 つの焼成室を連ねており、全国で現 存する最大規模のものである。陶栄窯 は昭和 49 年 1 月の窯出しを最後に停 止しており、現在では常滑市に唯一残 る登窯となっている。 登窯は江戸時代後期に鯉江方救、鯉 江方寿（親子）による導入がきっかけ で普及した。これによって窯詰場所の 違いによって生じる焼き加減のむら がなくなり、生産効率が上がったとい われている。	愛知県 常滑市
3-4	むけいぶんかざい 無形文化財 とこなめやき せいさくぎじゆつ 常滑焼の製作技術	市指定無形	とこなめやき 常滑焼の制作に必要な技法は様々な ものがあり、現在はヨリコ造り・ロク 口造りの技法や施釉・加飾の技法な ど、計 8 種の技法が常滑市指定無形文 化財に認定されている。	愛知県 常滑市
3-5	かごいけこよう 籠池古窯	県史跡	中世に使用されていたもので、現在は 第 3 号窯と第 9 号窯の 2 基が残ってい る。それぞれ一部を消失しているもの の、当時の形態を保っており、ここで 製作されたと思われる製品は重要な 民俗資料として陶芸研究所で所蔵さ れている。	愛知県 常滑市
3-6	たかさかこようあと 高坂古窯址	市指定史跡	とこなめとうぶ たかさかいけ おおがまいけしゅうへん 常滑東部の高坂池、大窯池周辺には 約 50 基の古窯址が集中している。そ の中で全長 14m にも達する窖窯(高坂 第14号窯)が常滑市により保存されて いる。この窖窯は 13 世紀半ばに築か れ、高さ 1m あまりの大甕が量産され ている。	愛知県 常滑市
3-7	こいえほうじゅおうけ はか 鯉江方寿翁家の墓	市指定有形	明治 18 年に鯉江方寿によって造られ た陶製の墓標である。墓の本体は土管 をモチーフにした円筒状で、土台は 鯉江家の窯で焼かれた赤レンガが、 台座は内藤陽三と寺内信一が制作し た陶板が用いられている。以後、常滑	愛知県 常滑市

			市域に陶製の墓標が多く作られるようになった。	
3-8	窯のある広場・資料館	国登録有形 (建造物)	(株)LIXILが運営する I N A X ライブミュージアム内の一施設で、1986 年に建設された。大正時代に建設された倒炎式角窯の保存を目的として整備され、現在は様々な資料とともに一般公開されている。角窯は煙道が下部にあり、火は焚口から一旦天井に上がった後に下部の煙道に向かう仕組みで焼成効率が優れている。大正から昭和にかけて活躍し、主要生産品だった土管が生産された。	愛知県 常滑市
3-9	旧 瀧田家住宅	市指定有形	やきもの散歩道散策地内にあり、かつて知多半島の廻船によって文化的交流や常滑焼の輸出等で常滑経済に貢献した船主の家屋である。当家は 1850 年頃に建てられ、現在は常滑市により復元整備され、一般公開されている。	愛知県 常滑市

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること（例：国史跡、国重文（工芸品）、県史跡、県有形、市無形等）。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること（単に文化財の説明にならないように注意すること）。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること（複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること）。

ストーリーの構成文化財一覧表（甲賀市）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
4-1	しがらきやきかまあとぐん 信楽焼窯跡群	県史跡	常滑の影響を受けて信楽窯は成立し、穴窯で室町・桃山時代の茶陶生産を担い、そして江戸時代には連房式登り窯へ移行した。京焼風小物施釉陶器は江戸・東京まで流通し、戦後、火鉢は日本全国で用いられた。	滋賀県 甲賀市
4-2	しがらきやき 信楽焼	市無形 (工芸技術)	古信楽を範とした伝統的技法による作品のつくり手のみならず、信楽の伝統を活かした制作を行う芸術性の高い作家まで広くその対象としている。	滋賀県 甲賀市
4-3	こしがらき 古信楽	未指定	室町時代後期になると、茶壺、 ^{うずくまる} 蹲、 ^{おにおけみずさし} 鬼桶水指は「 ^{わび} 侘」「 ^{さび} 寂」といった自然観を備え、堺・奈良・京都などの町衆に茶陶として見出された。	滋賀県 甲賀市
4-4	え ど じ だ い し がらきやき 江戸時代の信楽焼	未指定	連房式登り窯の導入後、將軍家に献上する宇治茶を詰めるための腰白茶壺、そして一大ブランドとしての地位を築き上げていた京焼の需要を補うため、小物施釉陶器の生産へ移行した。	滋賀県 甲賀市
4-5	きんだいしがらきやきせいひん 近代信楽焼製品	未指定	近代信楽の主産品である糸取鍋や ^{ひばち} 火鉢、 ^{きしやどびん} 汽車土瓶、そして戦時中の代用陶器の試作品などの資料が現在も残されている。	滋賀県 甲賀市
4-6	おかもとたろ う さくひん 岡本太郎作品	未指定	信楽の技術に注目した岡本太郎は、信楽で大阪万博のシンボル「太陽の塔」の背面の「黒い太陽」など作品の制作を行った。太陽の塔の顔レプリカや今も人気を博している《坐ることを拒否する椅子》は信楽伝統産業会館で常設展示されている。	滋賀県 甲賀市
4-7	こ び わ こ せう 古琵琶湖層	未指定	琵琶湖は伊賀付近に約400万年前に誕生した古代湖が北上を続けて、約100万年前に現在の位置まで移動した。湖の底に溜まった土砂や動植物の残骸などが堆積したのが古琵琶湖層で、ここから採取される土はやきものに適した土として信楽・伊賀のみならず京焼でも用いられた。	滋賀県 甲賀市
4-8	しがらき 信楽たぬき	未指定	昭和26年（1951）、昭和天皇が行幸された際に、信楽たぬきを並べて奉迎した。これが報道を通じて注目されて信楽たぬきは全国的に知られるようになったといわれる。	滋賀県 甲賀市

4-9	かまもとさんさくろ 窯元散策路	未指定	信楽の町は産業景観、なかでも伝統産業によって形成される集住・産業・街区景観である。 特に長野地区の窯元散策路は窯元散策をしながら信楽焼の制作現場を見学できる体験の場を一般向けに提供し、多くの観光客に親しまれている。	滋賀県 甲賀市
4-10	しがらきひ 信楽火まつり	未指定	長野地区の窯元と従業員らが、やきものを焼く火に感謝し、また鎮火を願って長野の氏神である新宮神社で元火を受け、松明を肩に担いで、愛宕山山上の火の神を祀る愛宕神社に奉納するまつり。	滋賀県 甲賀市
4-11	とうきいち 陶器市	未指定	各産地で行われる陶器市は、海外からも多くの人が訪れる有数のイベントである。店頭に並べられた陶器はさながらまちなかのミュージアムとなり、来訪者はやきものの肌触りを味わい、使い込むほど味が出る六古窯の陶器を求める旅情を楽しめる。 〈甲賀市〉信楽陶器まつり(10月) 信楽まちなか芸術祭(10月、3年に1度)	滋賀県 甲賀市

(※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例：国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

ストーリーの構成文化財一覧表（篠山市）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
5-1	たんばたちくいやき 丹波立杭焼	未指定	丹波立杭焼の発祥は、平安時代末期から鎌倉時代の初めといわれている。桃山時代までは、「穴窯」が使用されていたが、慶長 16 年ごろ、朝鮮式半地上の「登窯」が導入され、同時期に取り入れられた蹴りロクロ（日本では珍しい立杭独特の左回転ロクロ）とともに、伝統技術を今日に受け継いでいる。	兵庫県 篠山市
5-2	たんばやきこようあと 丹波焼古窯跡	県史跡	しとだに 四斗谷川下流域の下立杭周辺の丘陵には、丹波焼古窯跡が点在しており、その中でも摂津三田と境界を接する三本峠は丹波焼発祥の地とされる。史跡に指定された当古窯跡は源兵衛山古窯跡と呼ばれ、小字武士ケタの山麓に所在する。窯体は近年の植林等によって天井が崩壊し、長さ 18.5m の窪みの形状のみを残している。焚口部に少し窯壁が認められるとともに、そこから下方に灰原が広がり陶片が採取される。採取された陶片には甕や壺があり、器型に瓷器系の常滑焼の影響が見られる。調整は無釉・紐造・ろくろ仕上げで、自然釉を被るものもある。窯業史上、いわゆる『丹波焼』の研究において、重要な遺構である。	兵庫県 篠山市
5-3	たんばたちくいぼりがま 丹波立杭 登 窯	県重要有形民俗	丹波焼の現存する最古の窯として県指定重要有形民俗文化財に指定されている上立杭の登窯は、明治 28 年に造られた。山の勾配を利用して長さ 47 メートルにわたって築かれ、9 袋の焼成室を持っている。この登窯は経年劣	兵庫県 篠山市

			化などが激しく丹波立杭陶磁器協同組合が中心となり平成 26 年度より 2 か年大修復に取り組んだ。この事業には窯元をはじめ、多くのサポーターや一般の方に関わっていただき修復が完了した。	
5-4	たんばたちくいやくい さくようぎほう 丹波立杭焼 (作窯技法)	国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財 (選択)	丹波焼における連房式登窯の導入は、近世初頭の慶長年間(1596～1615)頃といわれており、この時期を境にして穴窯から登窯へ移行したものと考えられる。窯の築造にあたっては、まず適当な傾斜地が選ばれ、山の勾配が一定になるよう整地されます。場所が決まると「そだて石」が運ばれ、窯の基部が造られます。次いで型を用い、日干し煉瓦の「まくら」を「そだて」の内側から積み上げてアーチを組む。その後、窯壁の内外を山土で塗り、また、床面も塗り固める。そして、窯室の入口を造り、天井を支える柱である「さま」や薪の投入口の「あな」を設ける。また、焚き口である「火どころ」と煙の出口である「火さき」を造る。	兵庫県篠山市
5-5	こたんば 古丹波コレクション	県有形	丹波焼の創成期から江戸時代末期に至るまでの約 700 年間に 作られた代表的な品々を、年代・形・釉薬・装飾等に分類して展示している「丹波古陶館」は、江戸時代そのままの姿で妻入りの商家が立ち並ぶ河原町の一角にある。館内には、また、館蔵品のうち 312 点が「古丹波コレクション」として兵庫県指定文化財となっている。	兵庫県篠山市

ストーリーの構成文化財一覧表（備前市）

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
6-1	焼物の里の文化的景観	未指定	<p>窯元の角地に松割木のまきが規則的に積み重ねられ乾燥させられている。松割木は窯焚きの時、煉瓦製の煙突から黒色の煙がはきだす。</p> <p>伊部を囲む山々、不老山、^{ふろうざん}医王山、^{いおうざん}榎原山は流紋岩からなり、そこから生成、堆積した田土は備前焼の原料粘土として使用され、独特の味わいを器に描き出す。</p> <p>伊部の旧家の中には土塀に窯の破片・陶片を練りこみ、屋根に半分にした土管をのせるものがみられる。また段差のある敷地境界やあぜ道では土留に江戸時代の土管列もみられる</p>	岡山県備前市
6-2	備前焼の焼成技術	未指定	<p>備前焼は登り窯や窖窯で焼成されるが、炎によりうつわの表面に描き出された独特の味わいは「窯変」と呼ばれる。現在では「まき」で焼成する産地は少なく、窯焚きは釉薬を使わない土にあわせた独特のもの。</p>	岡山県備前市
6-3	無形文化財 備前焼の製作技術	国県重要無形 市指定無形	<p>高度成長期「備前焼中興の祖」^{かねしげとうよう}金重陶陽が人間国宝になり多くの作家が生まれた。現在では伊勢崎^{いせざき}淳氏をはじめ 5 人の人間国宝を輩出した焼物の産地として知られている。岡山県、備前市でもそれぞれ無形文化財の保持者を認定する制度を運用している。</p>	岡山県備前市
6-4	備前焼 ^{くまやま} 熊山古窯跡群	市指定史跡	<p>伊部の北、^{くまやま}熊山山中に点在する窯跡群で、鎌倉時代から室町時代のもの 17 基が市指定史跡となっている。付近には名勝地の屏風岩もある。</p>	岡山県備前市
6-5	^{びぜんとうきかまあと} 備前陶器窯跡 ^{いんべみなみおのがまあと} 「伊部南大窯跡」 ^{いんべきたおおがまあと} 「伊部北大窯跡」 ^{いんべにしおのがまあと} 「伊部西大窯跡」	国史跡	<p>室町時代末頃に築かれ、江戸時代は岡山藩の保護と統制を受けながら、窯元六姓の制度の中で幕末まで操業された大窯群で、いずれの窯でも長大な規模をもつ複数の窯が見つっている。榎原山山麓にある伊部南大窯跡には全長 53.8m、幅 5.5m の巨大窯がある。</p>	岡山県備前市

6-6	おばたさんちようほうじ あまつじんじゃ 小幡山長法寺・天津神社	市指定 (建造物)	備前焼の作家・窯元ゆかりの寺社で、備前焼が多く寄進されている。長法寺は報恩大師備前四十八ヶ寺のひとつで本堂は明和 7 (1770) 年に上棟。天津神社は、天正 7 (1579) 年現在地に遷宮されたもので、本殿は延宝 6 (1678) 年の改築。門・参道には備前焼瓦などが使用されている。	岡山県 備前市
6-7	こまいぬ 備前焼狛犬	県重文、市指定(工芸品) 外	備前地域では、神社の社頭で備前焼の宮獅子を見かける機会が多い。江戸時代後半から近代にかけて窯元の主力商品として多く作られ、全国へ流通した。木谷天神社に奉納された備前焼狛犬(貞享 3 (1686) 年の銘文、備前焼ミュージアム寄託) や片上宇佐八幡宮の大型(像高 1.4m、胴回り 2.5m、文政 9 (1826) 年の年号をもつ) の獅子は代表的な作品である。	岡山県 備前市
6-8	きゅうしずたにがっこう 旧 閑谷学校	国特別史跡 国宝・国重文	岡山藩主池田光政が造った日本最古の庶民のための公立学校といわれる。江戸時代前期の建物と配置がほぼそのままの形で残る。国宝の講堂や聖廟など主要な建物だけで約 5 万枚の備前焼の瓦が使用されている。元禄 13 年(1700) 銘の丸瓦も国宝に指定されている。	岡山県 備前市
6-9	備前焼まつり	未指定	備前焼のまち伊部で、毎年 10 月第 3 日曜日とその前日の土曜日開催。日本全国や海外から十数万人の方が訪れる大規模な陶器の祭となっている。	岡山県 備前市

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例: 国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧（越前町）

えちぜんやき
1-1 越前焼



しんめいがたにす え き がまあと
1-4 神明ヶ谷須恵器窯跡



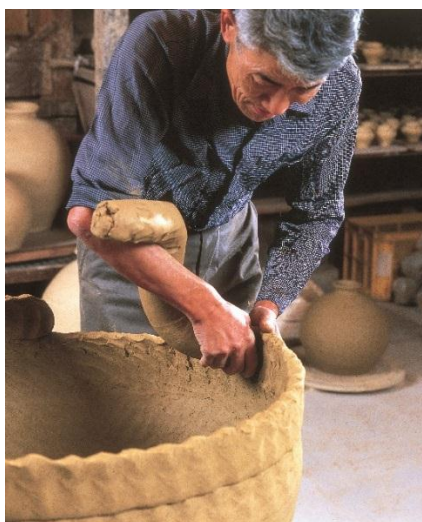
つるぎじんじやほんでん
1-2 劔神社本殿



えつなながま
1-5 越南窯



とうげいえちぜんおお ね せいけいぎほう
1-3 陶芸越前大がめ捻じたて成形技法



つるぎじんじゃもんじょ
1-6 劔神社文書



きたかまやかめばか
1-8北釜屋甕墓



えちぜんかまあとぐん
1-7越前窯跡群



さんきん こ
1-9三筋壺



えちぜんあかがわら
1-10越前赤瓦



えちぜんがわら
1-11越前瓦



構成文化財の写真一覧（瀬戸市）

2-1 陶土・珪砂採掘場



2-2 広久手第 30 号窯跡



2-3 瀬戸窯跡 小長曽陶器窯跡



2-4 瀬戸窯跡 瓶子陶器窯跡



2-5 陶製狛犬



2-6 古瀬戸瓶子



2-7 窯垣



2-8 窯垣の小径



2-9 赤津瓦



2-10 やきものの祭り



構成文化財の写真一覧（常滑市）

3-1 やきもの^{きんぽもち}の散歩道^{ぶんかてきけいかん}の文化的景観
《土管坂^{どかんざか}》



3-2 常滑^{とこなめ}の陶器^{とうき}の生産用具^{せいさんようぐ}・製品^{せいひん}



《れんが煙突^{えんとつ}（昭和30～40年当時^{しょうわ ねんとうじ}）》



のぼりがま
3-3 登窯



えんとつ
《煙突》



ないぶたきぐち
《内部焚口》



れんりつしょうせいしつ
《連立した焼成室》

むけいぶんかさい とこなめやき せいさくぎじゆつ
3-4 無形文化財 常滑焼の制作技術



かごいけこよう
3-5 竈池古窯



たかさかこようあと
3-6 高坂古窯址



こいえほうじゅおうけ はか
3-7 鯉江方寿翁家の墓



かま ひろば しりょうかん
3-8 窯のある広場・資料館



きゅうたき た け じゅうたく
3-9 旧 瀧田家住宅



構成文化財の写真一覧（甲賀市）

しがらきやきかまあとぐん
4-1 信楽焼窯跡群



えどじだい しがらきやき
4-4 江戸時代の信楽焼



しがらきやき わけいぶんかざい
4-2 信楽焼（無形文化財）



きんだいしがらきやきせいひん
4-5 近代信楽焼製品



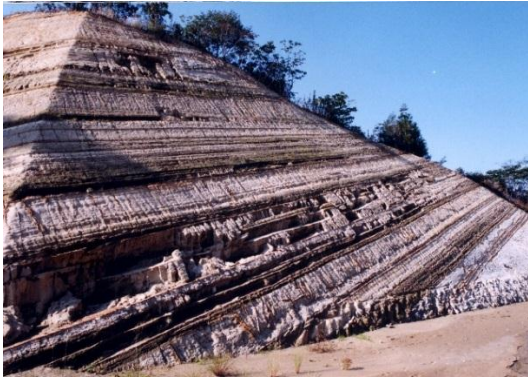
こしがらき
4-3 古信楽



おかもとたろうさくひん
4-6 岡本太郎作品



こびねこそう
4-7古琵琶湖層



しがらきひ
4-10信楽火まつり



しがらき
4-8信楽たぬき



とうきいち
4-11陶器市



かまもとさんさくろ
4-9窯元散策路



構成文化財の写真一覧（篠山市）

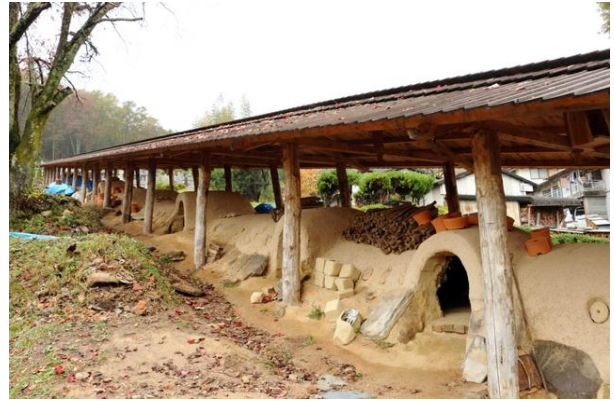
5-1 丹波立杭焼



5-2 丹波焼古窯跡



5-3 丹波立杭登窯



5-4 丹波立杭焼 (作窯技法)

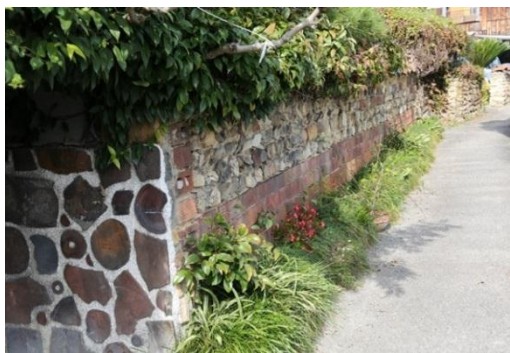


5-5 古丹波コレクション



構成文化財の写真一覧 (備前市)

6-1 焼物の里の文化的景観



(土壁)

6-2 備前焼の焼成技術



(まき)



(窯焚き)



(粘土)

6-3 無形文化財 備前焼の製作技術



(写真は国指定 伊勢崎淳氏)

6-6 ^{びぜんとうきかまあと いんべみなみおおがまあと} 備前陶器窯跡「伊部南大窯跡(写真)」
^{いんべきたおおがまあと いんべにしおおがまあと} 「伊部北大窯跡」「伊部西大窯跡」



6-6-1 ^{おぼたさんちようほうじ} 小幡山長法寺



6-6-2 ^{あまつじんじゃ} 天津神社



6-4 ^{くまやま} 備前焼熊山古窯跡群



6-7 備前焼こまいぬ狛犬



(木谷天神社 備前焼ミュージアム寄託)



(宇佐八幡宮備前焼狛犬)

6-9 備前焼まつり



6-8 旧きゅうしずたにがっこう関谷学校

